

(記入日：2020年9月30日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

「基礎ゼミナール」(1年前期必修科目2単位)、「コミュニケーション基礎演習」(2年前期必修科目1単位)、「イギリス文化史(1)(2)」(1~2年前・後期選択必修科目、各2単位)、「インターナショナル・プログラム(1)」(1~2年後期選択必修科目2単位)、「英語文学演習／国際文化演習(4)」(1~2年後期選択必修科目2単位)、「国際文化特講Ⅲ(児童と文化)」(3~4年後期選択必修科目2単位:集中講義)、「セミナー」(3年次通年必修科目4単位)、「MANGAとanime」(2~4年前期選択科目2単位)、「フェミニズム批評Ⅱ(2)」(大学院2年前期選択必修科目2単位)、「イギリス・アメリカ文化研究Ⅲ(2)」(大学院2年後期選択必修科目2単位)など。

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、社会にはそれぞれの人の立場、背負っている文化的・歴史的背景によってさまざまな価値観やものの見方・考え方が存在することを学生が理解し、相手の立場や価値観に配慮した柔軟で効果的なコミュニケーションを取れるようになること、さらにその理解をふまえて実社会の問題を調査・分析し、自分の立場を明確にした上でその問題について提言を行えるようになることである。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「基礎ゼミナール」と「国際コミュニケーション」では、資料の収集や分析、プレゼンテーションなど大学での研究活動の基礎を身につけさせるとともに、自分の立場を明確にした上で意見を述べるということを体験させるよう努めた。オンライン授業のため教室でのプレゼンテーション訓練や学生の相互評価はできなかったが、Teamsを通してプレゼンテーション原稿などの課題を提出させ、コメントを付してフィードバックした。「イギリス文化史(1)(2)」ではイギリスと非ヨーロッパ地域との関係に注目させ、イギリスが非ヨーロッパ地域を植民化する過程でいかに異文化を取り込みつつ自己形成したかを理解させるよう努めている。オンライン授業となった前期の(1)では、パワーポイント資料にナレーションをつけたビデオ教材を毎回アップロードし、学生がそれを視聴して課題にとり組む形をとった。共通教育科目の「MANGAとanime」では、日本の漫画やアニメが国際的な文化となりつつある状況を理解させるとともに、自分の好きな漫画・アニメ作品について、それを海外に紹介するとしたらどんな点に配慮すべきか、セリフや「描き文字」の英訳にどのような工夫が必要かについて考察させた。「セミナー」ではイギリスの児童文学作品に関する英語論文の一部を講読させ、作品の書かれた時代の社会背景がいかに作品に影響しているかをディスカッションしている。

大学院の「フェミニズム批評Ⅱ(2)」では、ヴィクトリア時代イギリスの女性雑誌 *The Girls' Own Paper* の一部、またそれに関連する英語論文を講読した。後期の「イギリス・アメリカ文化研究Ⅲ(2)」では、日英のファッション雑誌の記事を比較するとともに、日本独特のファッション文化が欧米でどのように受容されているかを論じた英語論文を講読している。

### 4 成果 (どうだったか：結果と評価)

リサーチとプレゼンテーションの基礎を身につけ、また、さまざまな立場が存在することを意識しつつ自分の意見を発信することができるようにするという点では、ある程度の成果を挙げた

と考えている。Teams を通して提出された「基礎ゼミナール」と「コミュニケーション基礎演習」課題では学生が少しずつ自分の目的意識を明確にし、資料の扱いを身につけつつレポートの執筆やプレゼンテーションの準備にとり組んだことが示されている（エビデンス 1）。また「MANGA と anime」の課題では、自分に関心のある漫画・アニメ作品を題材にしつつ、いかに国際社会に日本の文化を効果的に発信できるかについて独創的な考察が行われた（エビデンス 2）。その一方、オンライン授業という制約もあり、教員がテーマを提示して課題にとり組ませることが主だったため、学生が自分の関心にもとづき主体的に問題を発見してテーマ化する活動を行ったり、グループワークでお互いの活動を評価したりすることが難しかった。

大学院の授業については、ヴィクトリア時代イギリスの服飾文化をふまえつつ、現代のファッションにおける日本とイギリスの違いを考察するという院生のテーマにもとづき、かなり効果的な資料講読ができたと思う。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

学生の問題意識と主体性をより高める活動が必要になる。「MANGA と anime」のようなアクティブな学びを中心とする科目では、教員の働きかけは環境づくりにとどめ、テーマの設定やグループワークの進行を学生自身で運営するような形が望ましい。また教材についても、これまではプリントやパワーポイント資料の形で授業中に提示していたが、クラウドに保存するなどして学生が授業時間外に自由に閲覧できるようにし、より多くの授業時間を学生の主体的な活動にあてられるようにしたい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 「基礎ゼミナール」、「コミュニケーション基礎演習」課題（非公開）
- 2 「MANGA と anime」課題（非公開）

## ティーチング・ポートフォリオ

国際英語学科 倉林 直子

(記入日：2020年 9月1日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

(2020年度 前期)

アメリカ文化史(1) (1年次以上：選択必修2単位)、国際関係入門(1) (1年次以上：選択必修2単位)、国際文化演習(2) (2年次以上：選択必修2単位) など

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

アメリカをはじめとする他国に関する知識をさまざまな角度から伝えることによって、学生の目を世界に向けさせるとともに、教養を深め、異文化理解の楽しさや難しさを認識させることを目標としている。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

2020年度前期はオンライン授業だったため、対面とは異なる方式を取ったが、対面と同様の教育効果が得られるよう工夫した。

まず、すべての授業でパワーポイントベースの動画を1回につき2つ作成 (エビデンス1) し、原則として授業時間内に視聴させた。動画はなるべく対面と変わらない情報を伝えるよう心がけた。授業では動画を視聴させた後、その内容に関連した簡単な問題を解かせ、随時チャットで質問を受け付けた。

アメリカ文化史(1)と国際関係入門(1)では、残った時間で授業外課題として動画で扱った内容に関する短い論述をさせた (提出締切は授業日から4日後であり、動画は翌週の授業の前日まで掲示したので、授業に参加できなかった学生も授業外課題の作成は可能)。この課題は毎週行い、翌週にどのような点が不足しているかをコメントした上で返却した。学生一人一人の提出物にかなり詳しくフィードバックをしたので、初期のころに比べて、書く力が向上した学生が多かったと思う。

国際文化演習(2)では予習課題として大統領のスピーチの訳の一部を毎週提出させた。動画はその予習課題の英文を含めたスピーチをどのように訳せばよいかを詳細に説明するものだったので、予習課題のフィードバックでは、どの部分に注目してその日の動画を見たらいいかを個々の学生のコメント欄に詳しく記入した。動画では英語の説明だけでなく、その社会背景も詳しく説明した。残りの時間はチャットで質問を受け付けた。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

アメリカ文化史(1)、国際関係入門(1)では、初期のころに比べ、授業外課題の記述が良くなった学生が多かった(エビデンス 2)。また、期末の最終課題では、日ごろの課題よりも長い論述をさせたが、ほとんどの学生が授業の内容を理解し、論述の基本をきちんと押さえたレポートを提出できた(エビデンス 3)。

国際文化演習(2)では、ほとんどの学生が毎回欠かさず予習課題を提出したが、2回行った持ち込み可の試験で結果に大きな差が出た(エビデンス 4)。しかし、予習課題で英語力が足りず低評価だった学生が、動画をきちんと視聴することによって試験で高得点を取るというケースも見られたため、動画が学生の理解の一助になったと考えられる。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

学生の通信環境に配慮した結果、動画以外はすべてチャットと forms を使って授業を進めたため、学生の直の反応を知ることが難しかった。また、普段対面授業で見せている映像や画像が使用できず残念だった。しかし、今回のオンライン授業では forms などの新たな課題提出方法も学んだ。対面授業においてもこのような経験を活かし、インタラクティブな授業を心掛けていきたい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

エビデンス 1：自作動画 (stream) (非公開)

エビデンス 2：アメリカ文化史(1)、国際関係入門(1) 授業外課題 (forms) (非公開)

エビデンス 3：アメリカ文化史(1)、国際関係入門(1) 最終課題 (forms) (非公開)

エビデンス 4：国際文化演習(2) 中間、期末試験 (forms) (非公開)

エビデンス 5：授業内で使用するレジュメ (非公開)

## ティーチング・ポートフォリオ

(記入日: 2020年 9月 24日)

### 1 教育の責任(何をやっているか:担当科目)

日本の政治と国際社会(1-4年前後期選択必修科目、2単位)、海外から見た日本(2-4年前期選択必修科目、2単位)、EIAII(2-4年前後期必修科目、1単位)、EIAIII(3-4年前後期必修科目、1単位)、国際文化演習3(2-4年後期選択必修科目、2単位)、IELTSと英検の筆記と二次試験対策講座(1-4年、参加自由、単位なし)、英会話(1-4年、参加自由、単位なし)など

### 2 理念(なぜやっているか:教育目標)

人間の社会がコロナウイルスに試されている中、対面授業なしの一学期であった。対面授業と違い、遠隔授業中には講義内容の理解の確認や学生達の成績評価などの問題が山積していた。テクニカルな問題が多い状態の中、高等教育が果たすべき役割やその方法論について考える機会が増えた。対面教育が出来ないと、色々な妥協を認めざるをえない場合がある。しかし、高等教育の中でなくてはならないところが何であろう？結論から言えば、それはmetacognitive skillsではなからうか？日本の高等教育のコミュニケーションでよく出てくる「思考力」という概念に比べたらより狭く具体的且つ実用しやすいコンセプトであろう。Metacognitionというのは、簡単な言葉で言えば、思考についての思考、学ぶ過程そのものから学ぶ。思考力という漠然とした概念よりmetacognitive skillsの実践を徹底して取り入れた方が思考力の向上に結びつくのではないか(エビデンス①)。遠隔授業フォーマットが強いられている間にも採用可能である。

Metacognitiveとreflective pedagogyの目的は人間を自主的な学習者として育てることである。こういうpedagogyの中核には「何を学ぶか？何を学んだか？」のではなく、「どうやって学べばいいか？」という学生達自身による自問自答である。自分で自分の学びの仕方を自覚、分析、そして管理する能力を培うことがポイントである。自分の学び方の自覚、分析、と管理過程を言語化し、そして共有が出来ることによって、今も将来も欠かせないピアラーニングのスキルも身に付くであろう。

教育には何かを学ぶ、何かを教えるという場面が多いのだが、それはcognitively passive study behaviourを産んでしまいがちなアプローチであろう。社会に進出・活躍し、成功出来るのに何か必要かという、metacognitionを生み出すcognitively active study behaviourではなからうか。本学が導入しているラーニングポートフォリオもこういう教育方法論の一部であろう。

### 3 方法(どのようにやっているか:実践の工夫)

全ての科目のテーマの第一回の授業では、学生達がすでにもっている知識をクラスルーム会話を通し、自覚・共有し、テーマを取り扱う計画を議論し、作成する(エビデンス②)。議論の結果に応じ、予想していた授業の内容をある程度まで変更しても構わない。学生達各々がアクティブラーナーや自分の学びのリーダーである実感を持たせることが大事である。実際に、授業の内容を大きく変える必要は一回も生じなかったが、なぜこの内容がこのように学ばなければいけないのか学生達が理解したら、モチベーションの向上につながるという結果が期待出来る。この最初の段階でテーマの理解に必要な英語の専門用語の確認も出来る。教員が勝手に何が必要か決め押

し付けるような形ではなく、学習者の中から生まれてくるニーズに応えるような形が良いのではないか。（そのニーズの自覚に導かせるのは教員の役割である。）

授業が終わる前に、事前学習で確認しておいた理解と授業中で消化が出来た知識について考える場を作る。この段階で大事なのは学生達が自分の理解の変遷を辿ることである。授業の前に持っていた知識と授業中に接触した情報の間に矛盾しているところを見つけ、理解を深めることが出来る。そして、学生達が授業後はっきりしていないところを発見したら、ピアラーニングを通し、それを解明する能力を培う。

レポート課題を取り扱う時も、ピアラーニングを積極的に導入していた。MS Teams を利用すると、共有、ハイライト、コメントなどが簡単に出来るので、コロナ禍の前の授業に比べ、ピアラーニングをより多く活用した。レポートからのピアラーニングを実践する方法はいくつかあるのだが、学生達から集めたレポートの代表的な部分をまとめ、学生に効率的な順番で示す。各々のレポートを読ませ、レポートの要点をつかませた。このようなアクティビティを通し、学生達がお互いから学ぶことが出来ることが多くある。他の学生達がどういう戦略を用い、課題に取り組んだか、どういう資料を参考にしたのか、またその理由は何だったか、各々のレポートの著者がレポート制作過程で見落としたところはあったのか、証拠を十分に論じたのか？このようなアクティビティを終えたら、次元のmetacognitive skillsに結びつける。

また、summary より高度なsynthesisという纏め方の一種を導入した。Synthesisという纏め方を成功させるに必要なのは、今までに見た証拠や結論を新しい理解を得るために違う観点から見、組み合わせることである。海外から見た日本の授業では、日本の”religious life” を扱うときに、学生達に”Are Japanese people religious?” という題のレポートを書かせた。ピアラーニングの場でレポートを学生達に示す際、その効率的な方向を見据え、出す順番を決めたのは私だが、学生達が徐々に自分で大事な結論を出した。それは、英語の”religion”の定義について論じてからこそ説得力のある良質なレポートを書くことが出来る。教員がまず定義を示してから書くように指示するのではなく、学生達が自分で情報の混沌のような状態から結論を出すということがポイントである。そして、簡単なsynthesisのために今まで触れなかった新しい概念（迷信、俗信など）を日英両語で導入し、総括を試みた。（エビデンス③）

EIAの授業にも、metacognitive pedagogyに近づくような教育方法を部分的に取り入れた。一つの例を挙げると、ルールを教えるのではなく、学生達に問題があることを自覚させ、それを正すルール見付けさせ、作成させる。例えば、EIAII とIIIの学生達に共通の”tell”, ”say”, ”speak”, ”talk”の区別の難しさの問題である。それに関連するルールは学生達が幼い頃から教えられている。私に取り組んだ方法は次のようだった。まず、①学生達が実際に話した誤用例を提示する。そこに問題があるかどうかについて考えさせる。そして、②ビデオの教材を閲覧させ、それに基づき文脈からルールを作成させる。時間のかかる教育方法であるが、自主的に学べる能力の向上が最優先課題である。（エビデンス④）

政治の授業では安倍元総理大臣についてレポート課題を設定した。学生達に戦後日本の総理大臣の幾つの特徴に気づいてもらうために歴代の総理大臣のリストと在任期間を見せた。学生達が指摘したのは歴代総理大臣の在任期間が安倍前総理大臣に比べ相当短いということであった。その点に気付いてもらった後、日本の例が国際的にも興味深い例であることを確認してもらうために、イギリス首相やアメリカ大統領の名簿を示した。そして、その安倍前総理大臣が数々の疑惑として報道されたニュースの例を提示した。その報道にもかかわらず、安倍氏が六回もの選挙で自民党を勝利に導いた。安倍氏がなぜ記録的に長く総理大臣として活躍出来たかについてレポートを書かせた。このレポートを書く面白さと価値はどこにあるか、なぜこういうのを書かなければい

けないのか、ということを確認してから課題を設定することがmetacognitive pedagogy に近い教育方法論であろう。その後の授業でピアラーニングの場を設け、学生達がお互いから学ぶ機会を作り、指導した。

#### 4 成果(どうだったか結果と評価)

全てのレポートのディスカッションを通し、学生達が次の大事なところに気付いていた。①ほとんどの社会問題を取り扱うときに歴史学的に取り組むと大切なところが理解できる。②証拠をどう集め、扱うかによって議論の方向とその説得力が決まる。(エビデンス⑤)

今年度から新しく採用したEIA IIとEIA IIIのテキスト*Impact*も学生達のcreativity, critical thinking, communication とcollaboration を基軸にした教材である。利用していたアプリの一つFlipgrid にはコラボレーションとピアラーニングの機能が備わっている。学生達が自分のスピーチを録音し、共有したが、お互いに録音したコメントを送ったりした学生があまりいなかった。学生達のモノローグの練習の機会が増えたが、会話やインタラクションを実施することは難しかったのが大きい反省点の一つである。(エビデンス⑥)

Metacognitive skillsの面では、学生達が自分の学び方を積極的に管理する価値があること、そして、ピアラーニングを通し学べることが多いことに気付き始めた。(エビデンス⑦)

#### 5 今後の目標(これからどうするか)

学生達のmetacognitive skills の向上を基軸に置いた教育の方法論と実践をシラバスにどう体系的且つ有効的に盛り込むかを検討し続ける。大きな課題として残っているのはmetacognitive skillsの向上度の正式な評価であろう。

#### 6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

- ① Kaplan, M. et al (eds.). (2013) *Using Reflection and Metacognition to Improve Student Learning*. Sterling: Stylus.
- ② 各科目のシラバス
- ③ 授業中のインタラクションとコメント (非公開)
- ④ 授業中のインタラクション (非公開)
- ⑤ 授業中の学生からのコメント (非公開)
- ⑥ EIAのFlipgridグループ (非公開)
- ⑦ 学生からのコメント (非公開)